

図1 調査対象施設の選定にかかる全国の保育施設規模分布

表1 調査対象施設概要

施設区分	幼稚園						保育所			
	Hy	Py	Ey	Sy	Ny	My	Kh	Yh	Hh	
調査対象施設	Hy	Py	Ey	Sy	Ny	My	Kh	Yh	Hh	
調査日	20.10.08	20.10.22	20.10.02	20.09.29	20.09.22	20.11.25	20.11.28	20.11.07	20.11.04	
所在地	滋賀県 愛荘町	大阪府 大阪市	滋賀県 東近江市	大阪府 枚方市	大阪府 大阪市	奈良県 磯城郡	滋賀県 草津市	大阪府 大阪市	大阪府 高石市	
調査時間	9:00 ~ 14:00	9:00 ~ 14:00	9:00 ~ 14:00	9:00 ~ 14:00	9:00 ~ 14:00	9:00 ~ 14:00	9:00 ~ 16:00	9:00 ~ 16:00	9:00 ~ 16:00	
設立年	1984	1953	1963	1972	1983	1965	1971	1980	1968	
建物の建築年	24	32	16	36	25	43	19	28	41	
敷地面積 (m ²)	2824.05	2700	2476	2071	2574	929.25	1112.44	909.8	2203	
延べ床面積 (m ²)	719	1128	622	1460	1043	557	1013.84	746.65	997.74	
園児数 (人)	41	414	72	83	161	102	101	135	156	
対象保育室 数及び現員	5才	1,18	1,36	1,29	2,26,26	1,24	1,15	1,24	1,27	1,26
	4才	1,23	1,36	1,20	1,31	1,30	1,18	1,17	1,26	1,28
	3才		1,22	1,23			1,18		1,26	1,28



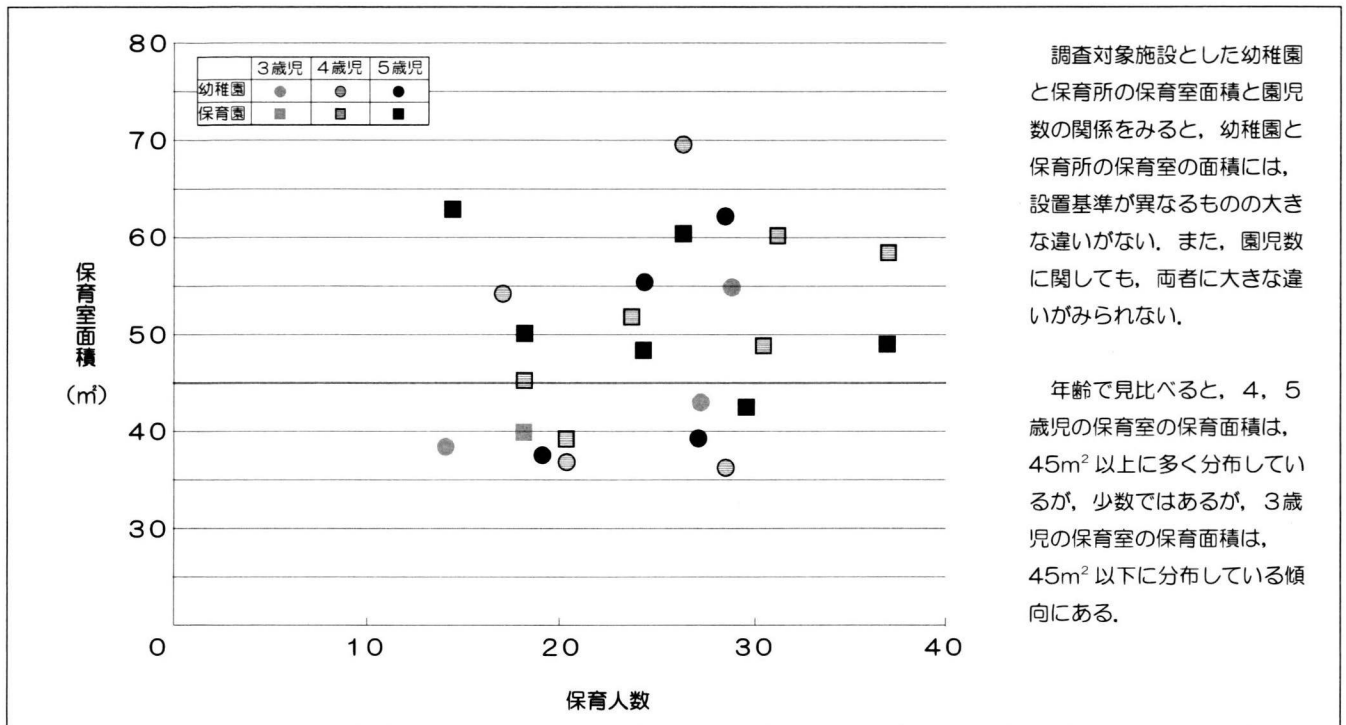
図3 調査対象保育室平面図

があることがわかるが、幼稚園の場合には、保育室面積とクラスの園児数には比例の関係は見られず、40～70㎡程度の保育室面積の領域に、幅広い園児数の事例が存在する点が特徴的である。これは、同じ面積でも保育人数が異なり、園児1人あたり面積にばらつきが大きいことを意味する。なお、この調査対象施設の選定は関東地域、東海地域、関西地域の3地域で、それぞれ10施設程度を目安として行った。本稿では、関

西地域での調査結果を基に、園児の活動実態からみた保育室の適正規模算定についての試論を示す。

B. 2 調査対象施設の概要

調査対象とした幼稚園6施設と保育所3施設についての施設概要を表1に記し、調査対象施設の保育室面積・園児数分布一覧を図2に示す。それぞれの施設で、学齢ごとに複数のクラスがある場合は、そのうち典型



調査対象施設とした幼稚園と保育所の保育室面積と園児数の関係をみると、幼稚園と保育所の保育室の面積には、設置基準が異なるものの大きな違いがない。また、園児数に関しても、両者に大きな違いがみられない。

年齢で見比べると、4、5歳児の保育室の保育面積は、45㎡以上に多く分布しているが、少数ではあるが、3歳児の保育室の保育面積は、45㎡以下に分布している傾向にある。

図2 調査対象施設の保育室面積・園児数分布一覧

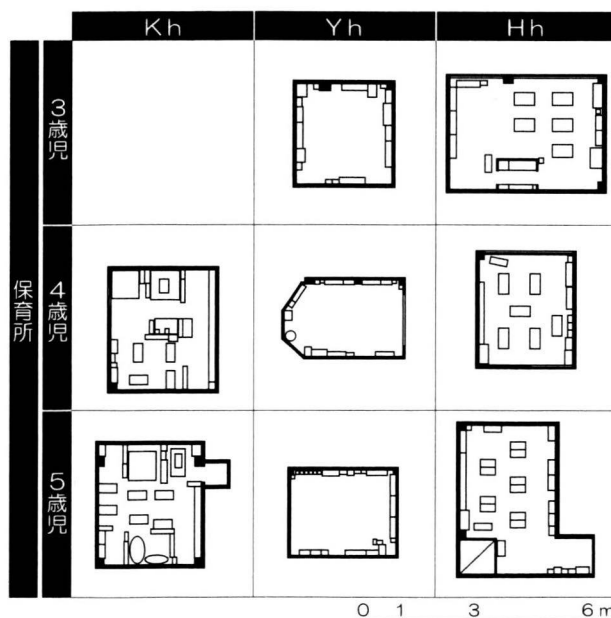


表2 調査方法

調査方法
1) 保育室でのコーナー等の設え実態についての調査 各保育室について、その場で簡易に作成した平面図に、家具の大きさを記録する。
2) 保育室での活動実態についての調査 ①遊び、食事、午睡がどこで行われているかを把握する。 ②調査は、写真撮影+平面図へのメモによるものとする。 ③調査基本保育の時間中施設に滞在し、30分に1回のペースで施設内を巡回し、各保育室の様子を記録する。
3) 保育室の広さ、コーナー設えについての評価の調査 ①その保育室の定員と現員を把握する。 ②その保育室を担当している保育者に、保育室の広さについて評価してもらう。

※保育室の広さについての評価では遊びの場面、食事の場面、午睡の場面でもとせまい、せまい、ちょうどいい、広い、とても広いの5段階で評価してもらう。

的な設えおよび活動と判断した1クラスを施設運営者に選定していただく方式で、基本的には1学齢1保育室の調査を実施した。この調査は、許可をいただいた保育室に限って実施したため、また幼稚園では0～2歳の部屋をもたないため、データが得られた年少児室の事例が少ない。このため、本稿での分析対象は、3～5歳児室とする。なお、これらの年齢では幼稚園と保育所で施設設置基準が異なるものの、分布に明確な違いがみられない。このため、幼稚園と保育所での結果を総合して論を進める。

また、調査対象保育室の平面図(図3)をみると、家具やコーナーのつくりなどの保育室内の設えは、1

つの施設内での年齢による違いは小さく、それぞれの施設間での違いが大きいことがわかる。

B. 3 調査方法

調査では、観察調査とヒアリング調査を以下の要領で行った。

- ①各保育室について、その場で簡単な平面図を作成し、家具の大きさを記録する。
- ②30分に1回程度のペースで施設内を巡回し、各保育室の様子を、写真撮影と平面図への付記で記録する。
- ③保育室を担当している保育者が、保育室の広さを、

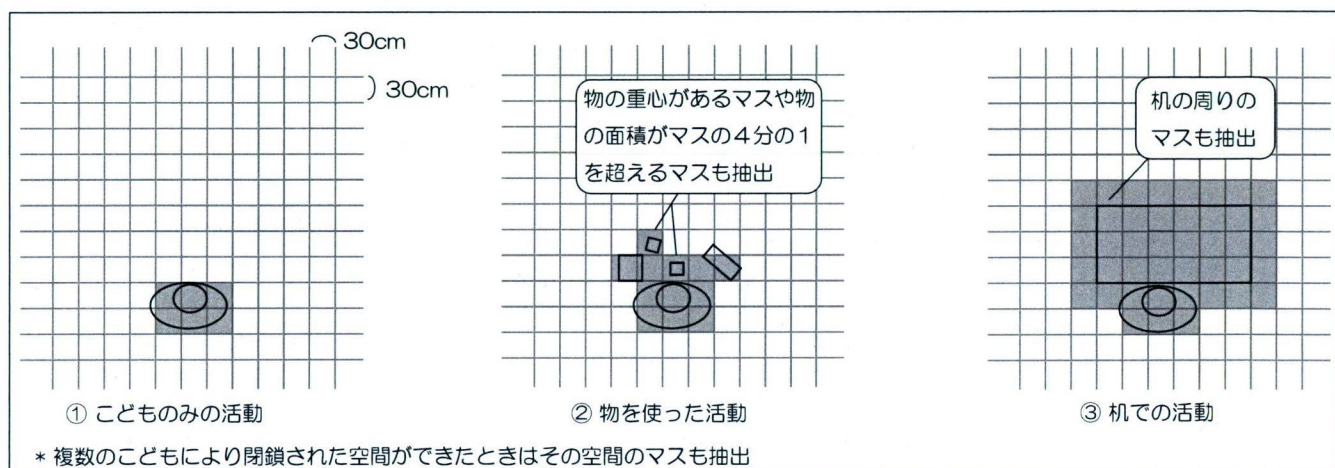


図4 活動範囲の定義

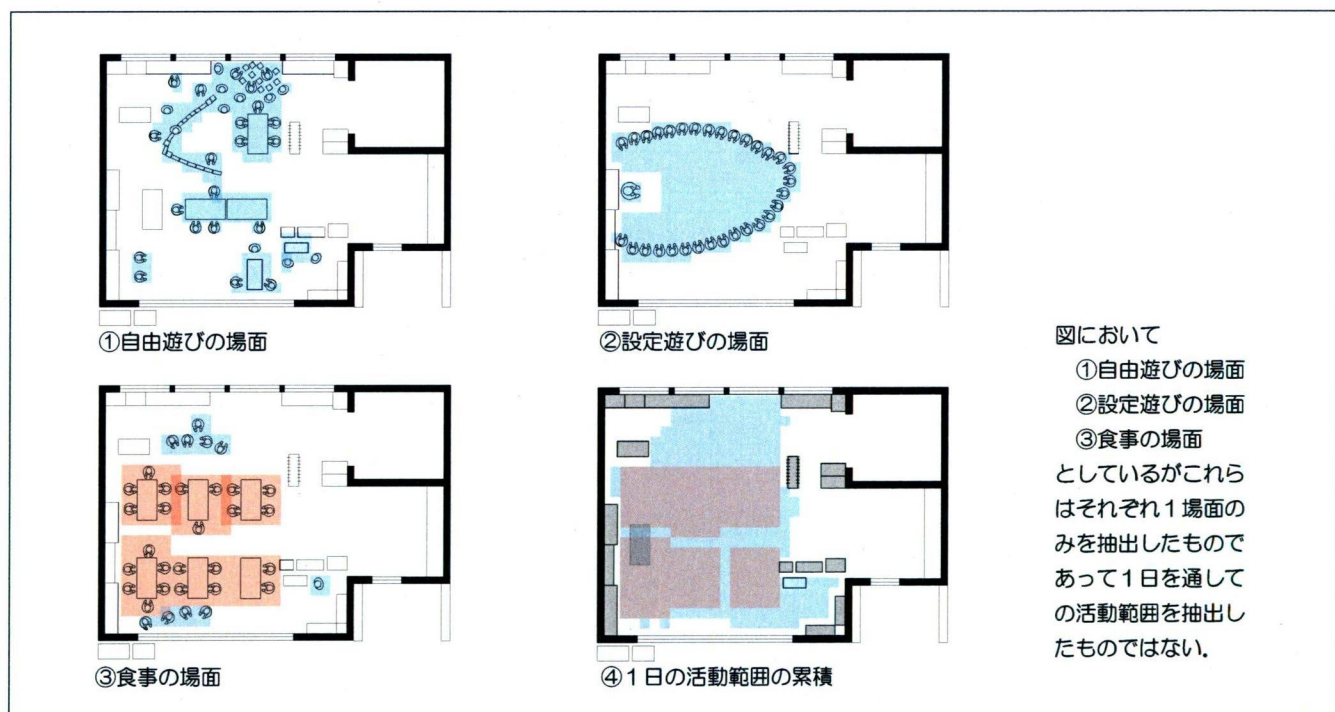


図5 各活動場面面積の抽出

食事場面と遊び場面についてそれぞれ評価する。

観察調査時間は、対象施設での基本保育時間とし、幼稚園で9時～14時、保育所で9時～16時である。詳細な調査方法については、表2に記載する。また観察調査で記録した活動を遊び、食事、午睡、に分類しそれらの活動の1日の累積を以後の分析の際に活用することとする。

なお、それぞれの活動場面での評価においては、「広すぎる」「やや広い」「ちょうどいい」「ややせまい」「せますぎる」との5段階で評価を収集した。これらの評価に、それぞれ5～1の数値を便宜的に割り付け、数値に置き換えて分析を行う。例えば、和を用いない評価では3が「ちょうどいい」、2が「せまい」という評価を意味する。

B. 4 活動面積範囲の抽出

活動範囲の抽出に際しては、図面上に機械的に30×30cmのグリッドをおいた(図4)。これによってできるマス単位として、各保育室において1日の活動範囲をこどもの位置のプロットを元に30分ごとの各場面ごとに、面積が4分の1を超えるマスを抽出した。また、こどもが活動時に「物」を使用している場合の活動範囲の抽出としては、物の重心のあるマスとこれらをはみ出している面積がマスの4分の1を超えるマスを抽出した。さらに、机での活動については30cm(1マス分)を活動範囲とみなした。複数のこども、活動に使用された物、コーナー設定に用いられた家具など

によって閉鎖された空間も活動面積として抽出した。

これらの活動範囲の抽出方法をもとに、Syの4歳児室において、実際の活動範囲を求めた経緯を、図5に例示する。図では、3場面(自由遊びの場面・設定遊びの場面・食事の場面)について活動範囲を抽出しているが、これらは1場面のみを抽出したものであって1日を通しての活動場面を抽出したものではない。本研究では、活動別に適正規模を算出していくが、その際に使う活動別の範囲は各活動での1日の活動範囲としている。

なお、活動面積規模の抽出に際しては、文献^{1) 2)}を参照した。

(倫理面への配慮)

本研究にあたっては、記録方法の一環として写真撮影手法を用いているため、記録時にはこどもの顔が極力写らないように努め、また分析においては個人が特定できない形でのデータ化を行なった上で詳細な分析を行なった。

調査対象クラスの選定に際しては、対象施設の運営者および担任による指定を受けるものとし、例えばこどもへのマイナスの影響が予想されるクラスにおける調査は実施しなかった。

C. 研究結果

調査で得た結果をもとに1人あたりの保育室面積と

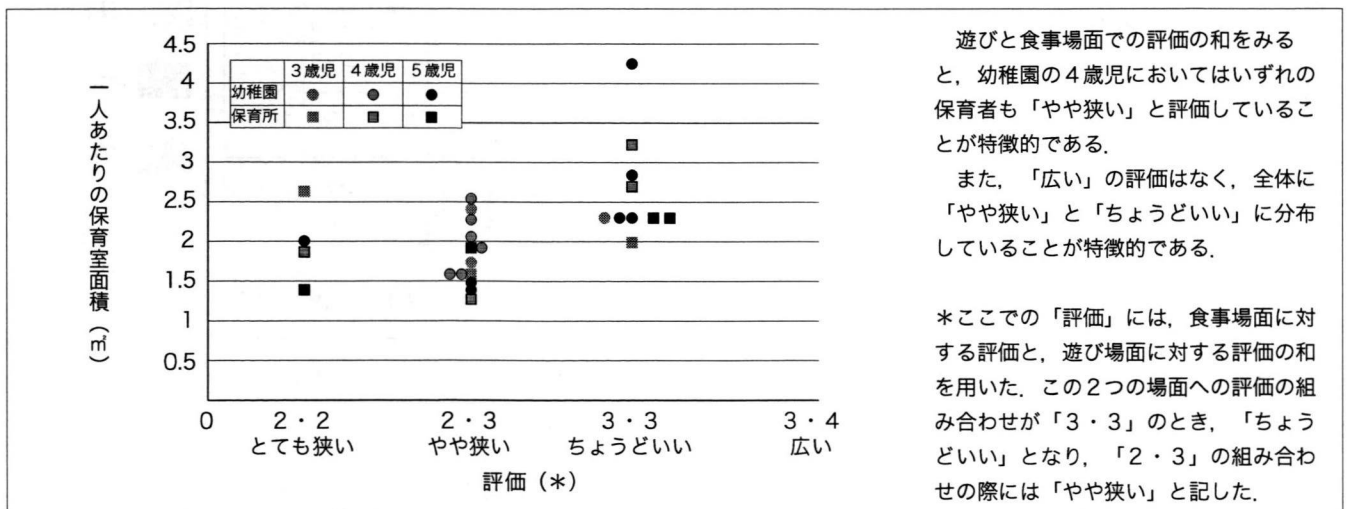


図6 保育室の1人あたり面積と評価の関係

広さ感評価との関係、保育室面積に占める各活動での使用面積、各活動面積と広さ感評価の関係、園児1人あたりの遊び面積・空き面積・その他面積の割合と評価の分布、1人あたりの遊び面積と1人あたりの保育室面積の関係について述べる。

C. 1 園児1人あたりの保育室面積と広さ感評価との関係

1人あたりの保育室面積と保育者の広さ感評価について述べる。図6は、保育室の1人あたり面積と保育者による広さ感評価の関係を示している。評価には、保育者による遊び/食事場面での評価の和を用いた。「広い」の回答はなく、「ちょうどいい」と評価した事例は、図より1人あたり保育面積が2.0㎡以上である。同時に1人あたり保育室面積が2.0㎡以上ある保育室でも「せまい」と評価している事例が複数みられる。これらから1人あたりの保育室面積だけでは保育室の適正規模を算出することが困難であるということがわかる。

C. 2 保育室面積に占める各活動での使用面積割合

上記により、単純に1人あたり保育室面積では基準が導出できないため、活動実態に即して適正規模を考察する。

まず、図7に保育室面積に占める各活動での使用面

積割合を示す。保育室内の面積を、グリッドを元に食事、遊び、午睡、生活スペース、空スペース、管理スペースの6つの活動に使われた面積で数え上げ、それらの保育室内での1日を通しての割合を表す。棒グラフで凡例が重なっている箇所は、複数の活動で使われた面積を示す。図中では幼稚園と保育所、3～5歳児の6つに分類しそれぞれに該当する保育室内での平均をグラフにした。なお、生活スペースとは棚など収納するための空間あり、空スペースとは使用されていない空間や動線として使用される空間、管理スペースとは、おもに保育者が使用する空間である。

この整理の結果、食事面積、午睡面積は1日でみると遊び面積に概ね含まれており、また管理スペースの占める割合も少ないことがわかる。よって保育室内の面積は遊び、生活、空き面積でほとんどを占めているといえる。

C. 3 園児1人あたりの遊び面積・空き面積・その他面積の割合と評価の分布

図8に園児1人あたりの遊び面積・空き面積・その他面積の割合と評価の分布を示す。1人あたり遊び面積と空き面積、その他面積の3つの割合を百分率で表した。その他面積には食事のみに使用された面積、生活スペース、管理スペースが含まれる。ここでの評価は遊びの場面での保育者の広さ感評価を使用している。

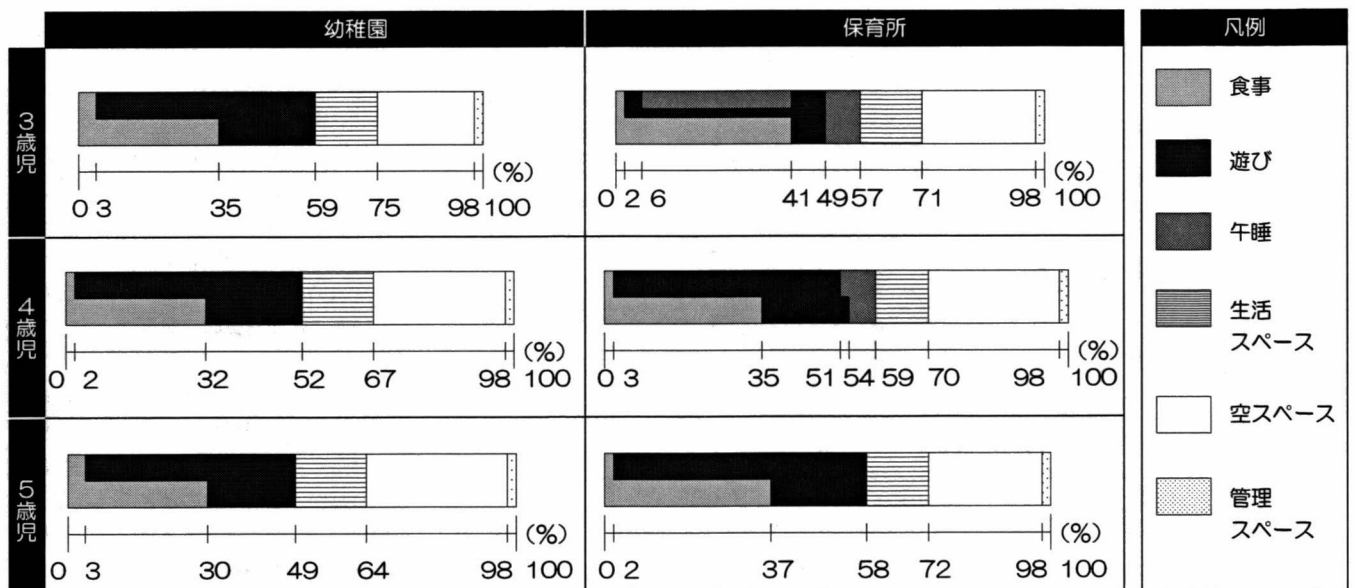


図7 保育室面積に占める各活動での使用面積割合

3歳児クラスにおいては幼稚園、保育所ともに比較的散々と分布している。1施設を除いて、1人あたりの空き面積が約20～25%の間で、それぞれ同じ程度のパーセンテージである。

4歳児クラスにおいては幼稚園、保育所それぞれにおいて評価の特徴がみられないが、すべての施設において、1人あたりの遊び面積の割合が一番高く、1人あたりのその他面積の割合が一番低いという分布の特徴がみとれる。

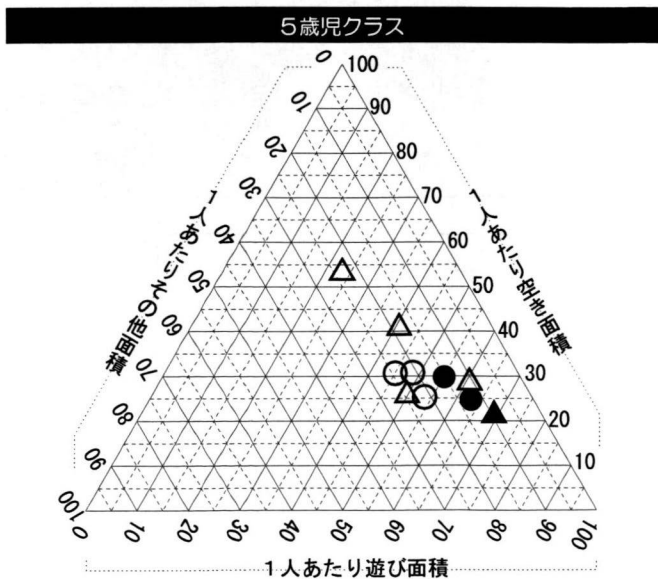
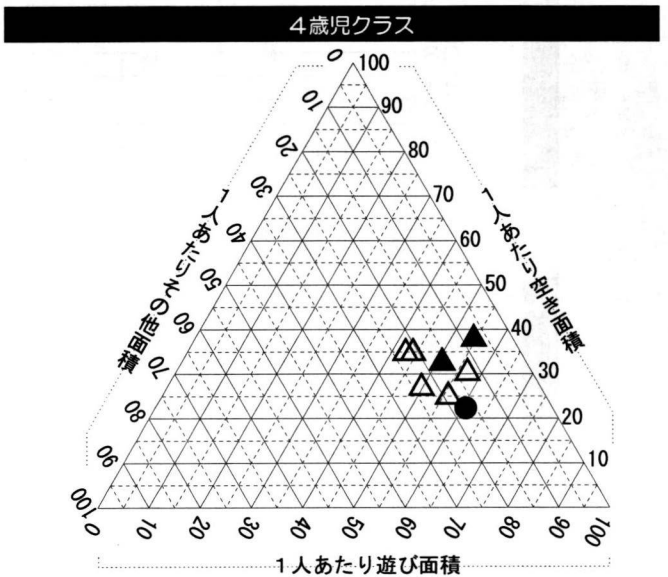
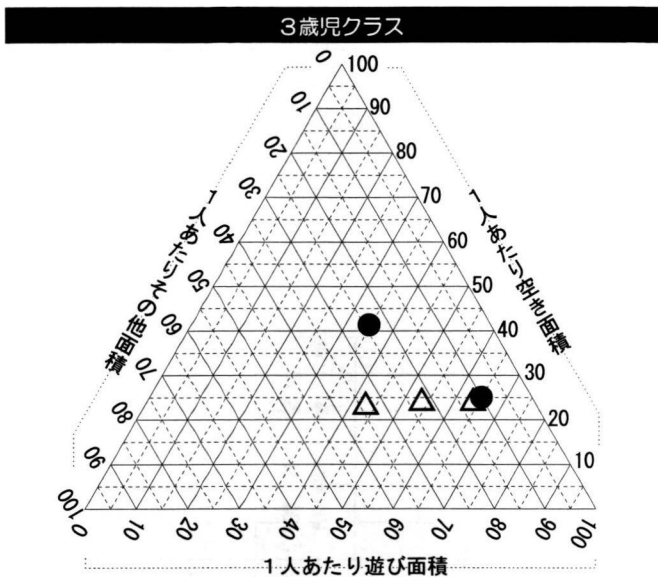
5歳児クラスにおいては、1人あたりの遊び面積が3歳児、4歳児クラスに比べて幅広く分布している。また、幼稚園の「ちょうどいい」の評価が1つに集中

している。

クラスごとに評価の分布に一定の傾向は見られるものの、明らかな差異とまでは言い切れず、活動面積割合と評価に明確な関係性は見られない。すなわち、保育室の面積のうち何割が定位的な活動がおこなわれないう空きスペースとなり、何割が活動に使われる面積か、といった評価の構造は明らかではない。

C. 4 各活動面積と広さ感評価の関係

保育者に広さ感評価をしてもらった遊びの場面、遊びのみの場面、食事の場面、空き面積の場面の面積、1人あたり面積と広さ感評価との関係について述べる。



1人あたりの遊び面積・空き面積・その他面積の割合を百分率で表した図である。

3歳児クラスでは、比較的散々と分布している。

4歳児クラスでは、すべての施設において、遊び面積>空き面積>その他面積の関係が読み取れた。

5歳児クラスでは、遊び面積が3歳児、4歳児クラスと比べて幅広く分布している。

	ちょうどいい	せまい
幼稚園	○	△
保育所	●	▲

図8 園児1人あたりの遊び面積・空き面積・その他面積の割合と評価の分布

なお、ここでの評価では、3 = 「ちょうどいい」、2 = 「せまい」の評価を意味する。また、「1人あたり面積」 = 「水回りを除く保育室面積 ÷ 保育人数 (m²/人)」である。水回りは、それぞれの保育室によって設置状況が異なる。そこで、分析の公平を期するため水回りが保育室内にある場合にはその面積を分析対象面積か

ら除くこととした。

1) 食事場面の面積、1人あたり面積と広さ感評価との関係 (図9)

食事場面についての広さ感評価では、3～5歳児それぞれの年齢を通して「ちょうどいい」という評価が多い。4歳児においてはすべての事例で「ちょうどいい」

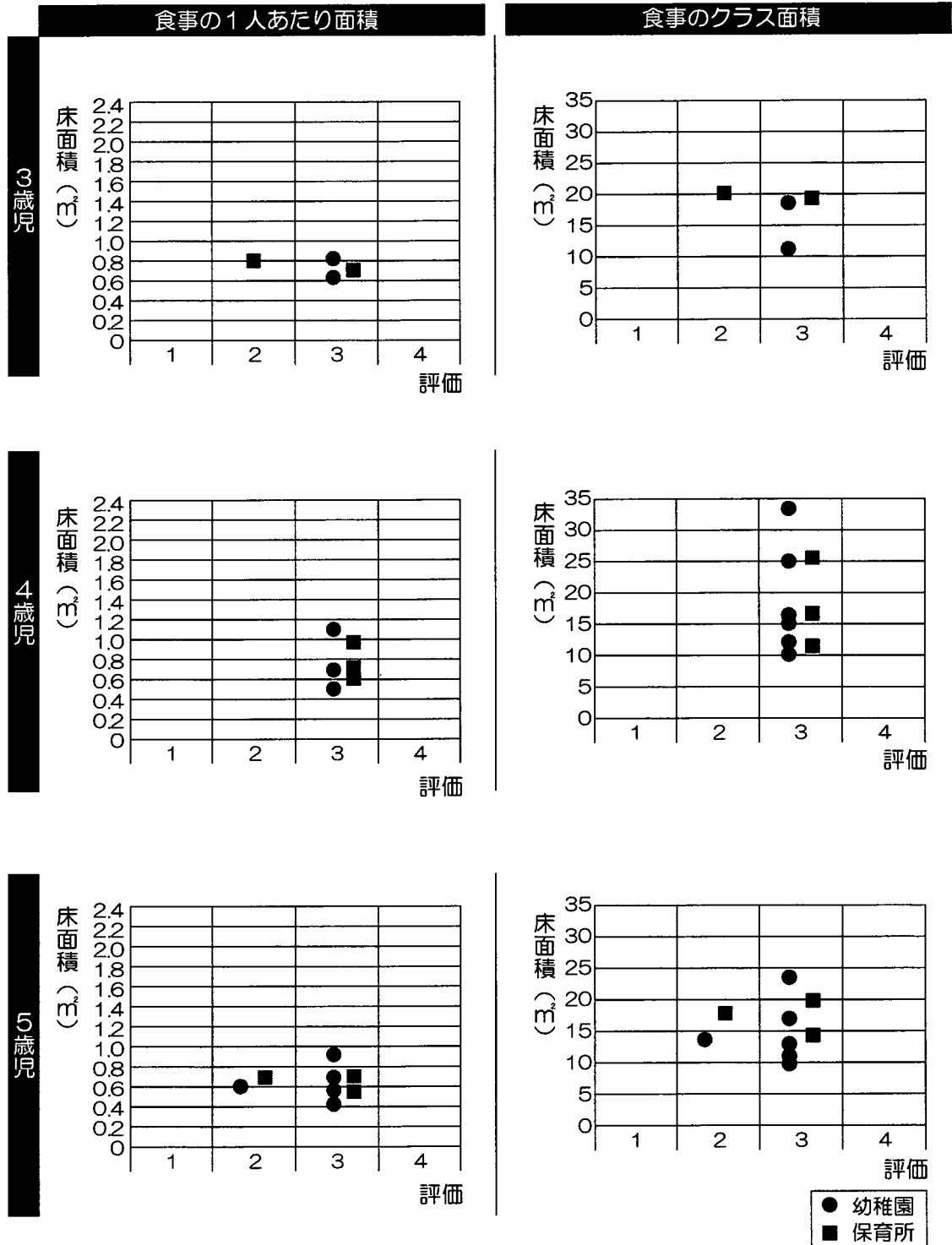


図9 食事場面の面積・1人あたり面積と評価の関係

と評価している。

このため、1人あたり面積、保育室面積ともに広さ感評価との関係を見ても両者には関係性は見いだせず、面積規模について特段の問題は生じていない。食事の面積はどの年齢においてもほぼ十分に確保されていると言える。

2) 空き面積、1人あたり面積と広さ感評価との関係(図10)

図は、空き面積と、遊び場面(自由遊び)での評価の関係を示している。食事の際には移動を伴わないため空き面積の有無はほぼ問題にならないが、自由遊び場面においては、こどもたちが自由に移動と滞在を繰

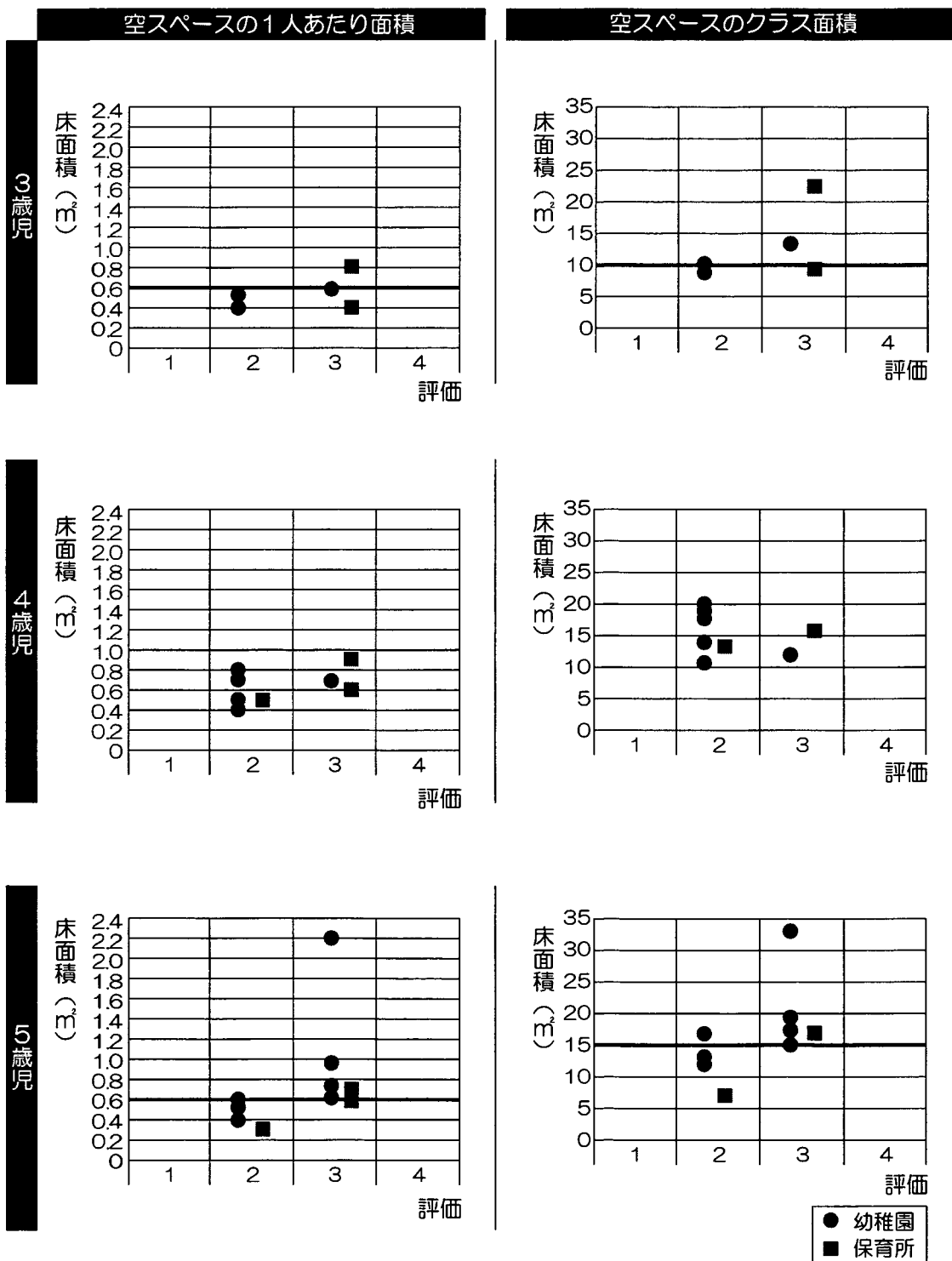


図10 空面積場面の面積・1人あたり面積と評価の関係

り返す。このため、空き面積の多少は、定位的な遊び活動場面についての評価にも影響を与える可能性があるかと予想した。

空き面積の評価においては3歳児と5歳児で1人あたり面積によって「やや狭い」と「ちょうどいい」という評価が別れている様子が見られる。この、評価の境

界となる面積の値を、以下では評価境界と呼ぶこととする。

3歳児においては空き面積のクラス面積と評価の関係で10㎡のところ評価境界をひくことができる。また、1人あたり面積と評価の関係では、幼稚園において0.6㎡のところ評価境界をひくことができる。

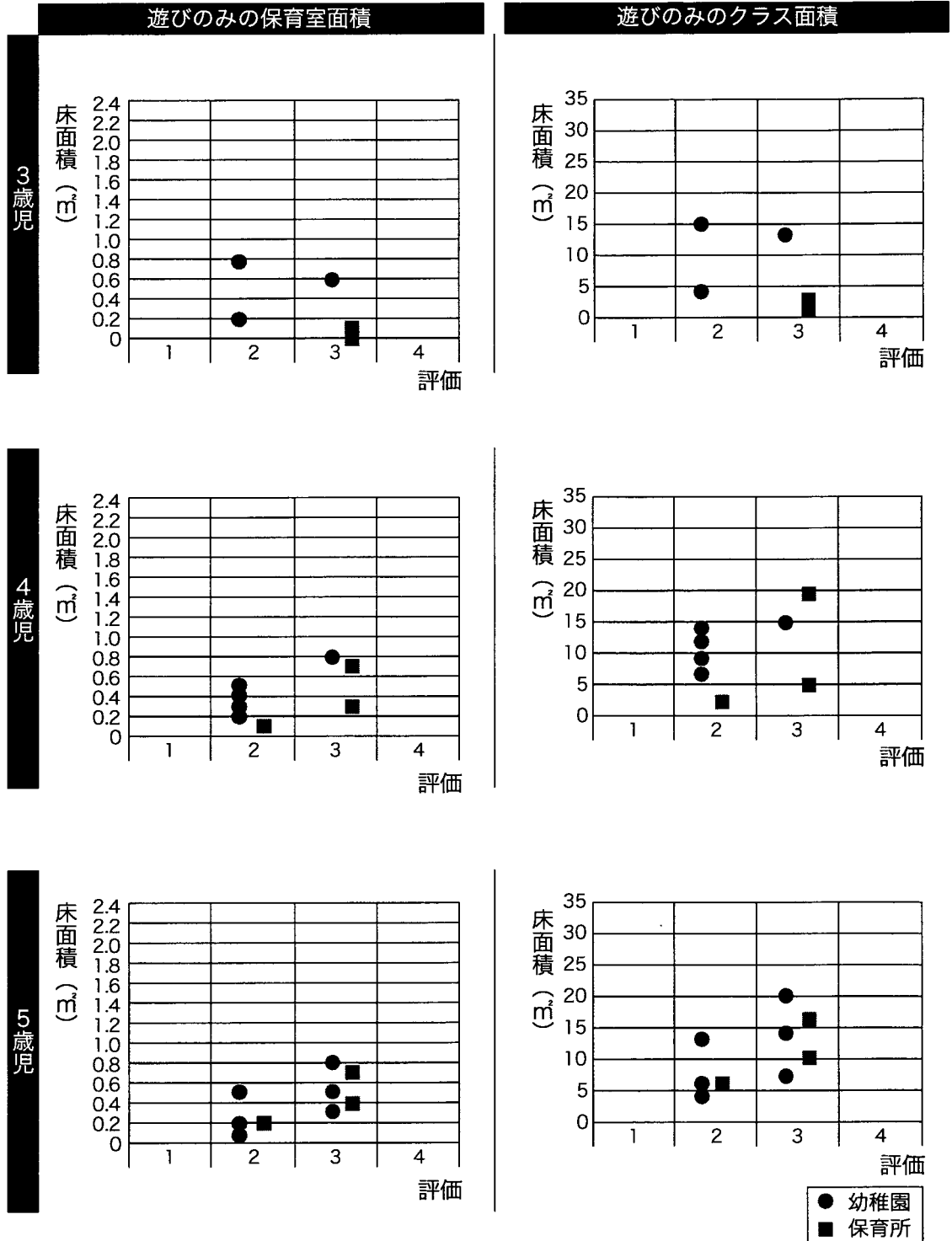


図 11 遊びのみ場面の面積・1人あたり面積と評価の関係

4歳児においては空き面積のクラス面積、1人あたり面積と評価には関係性が読み取れない。すなわち、明確な評価境界が存在しない。

5歳児においては空き面積のクラス面積と評価の関係で15㎡のところ評価境界をひくことができる。また、1人あたり面積と評価の関係で0.6㎡のところ

に評価境界をひくことができる。さらに、5歳児では、保育所の1人あたり面積がわずかに幼稚園の1人あたり面積よりも全体に低い傾向があり、幼稚園と保育所の間で適正規模の基準が異なる可能性が見いだされる。しかし、実態に即して考えると幼稚園よりも長時間の滞在を前提とする保育所において、必要とされる1人

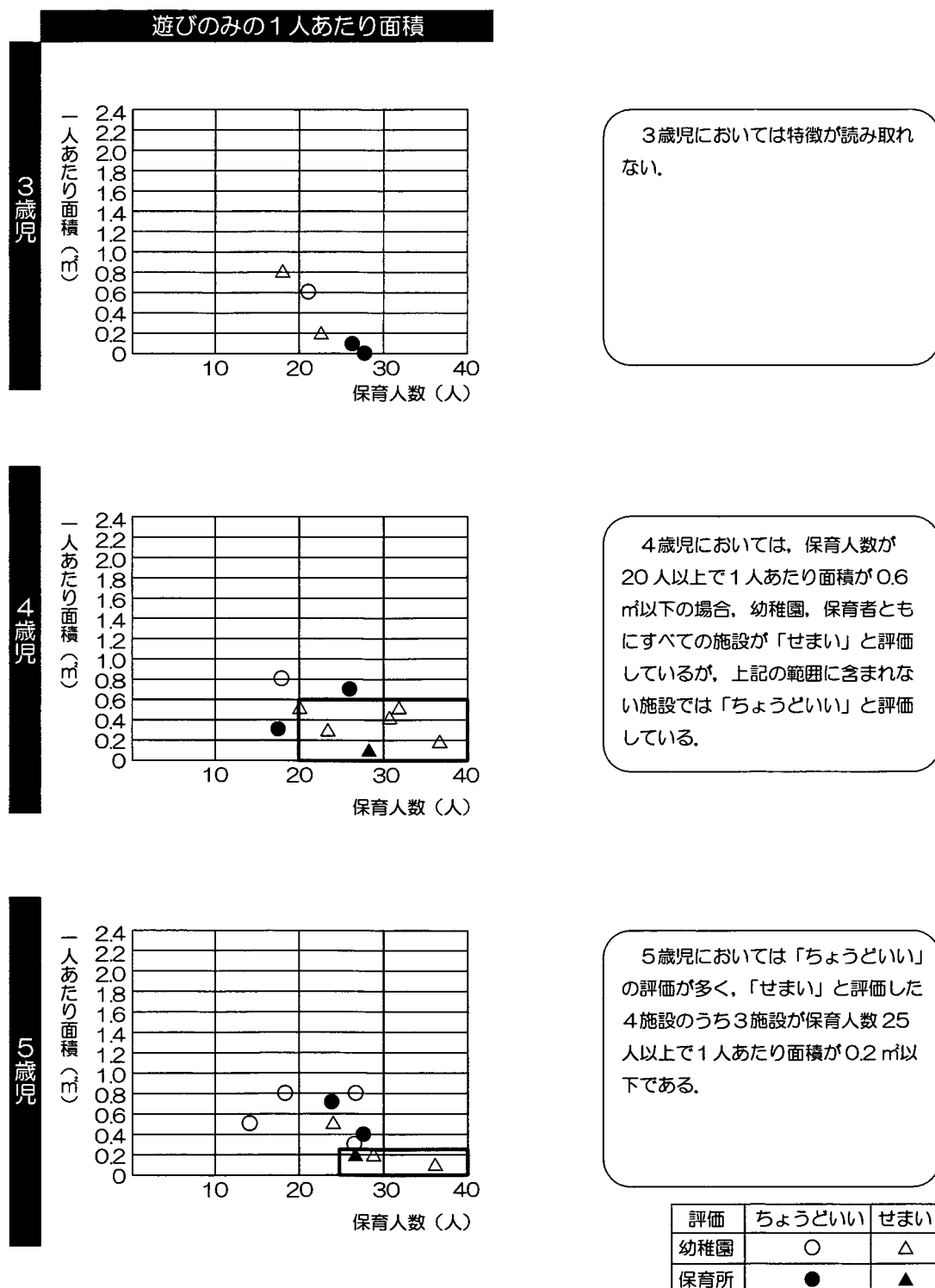


図 12 遊びのみ場面（保育単位）の面積・1人あたり面積と評価の関係

あたり面積が少ないことは特異的であり、クラスの処遇規模などとの関係で精査が必要であると考える。

3) 遊びのみ場面の面積、1人あたり面積と広さ感価との関係 (図 11)

3～5歳児において遊びのみのクラス面積、1人あたり面積と評価には関係性がみられない。そこで、1

人あたり面積と評価において保育人数で比較した (図 11)。3歳児においては特徴が読み取れないが、4歳児においては、保育人数が20人以上で1人あたり面積が0.6㎡以下の場合、幼稚園、保育者ともにすべての施設が「せまい」と評価しているが、上記の範囲に含まれない施設では「ちょうどいい」と評価している

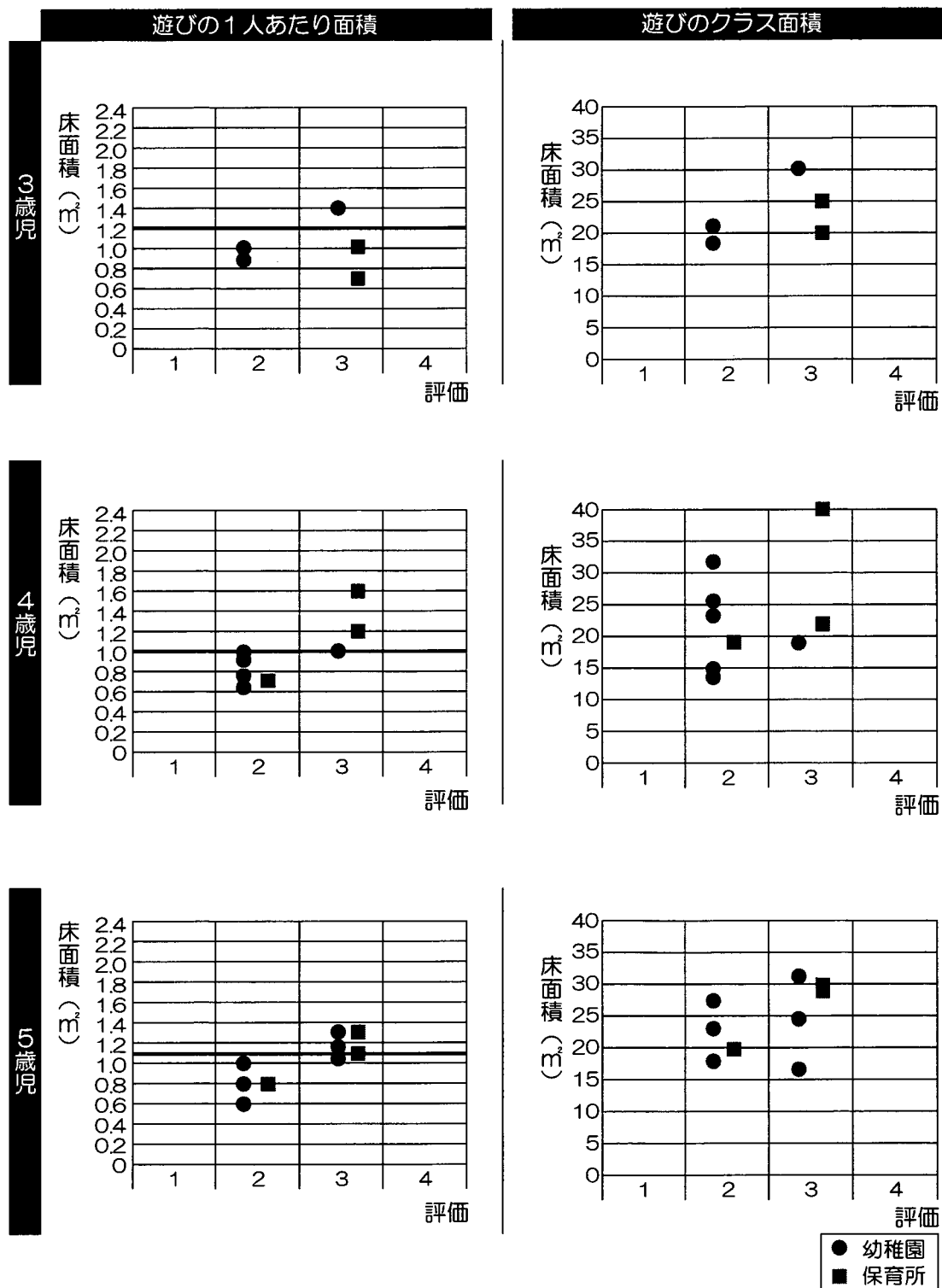


図 13 遊び場面の面積・1人あたり面積と評価の関係

ことが特徴的である。また、5歳児においては「ちょうどいい」の評価が多く、「せまい」と評価した4施設のうち3施設が保育人数25人以上で1人あたり面積が0.2㎡以下である。

4) 遊び場面の面積、1人あたり面積と広さ感評価との関係 (図13)

3歳児においては、遊びのクラス面積と評価の関係に評価の境目となる評価境界を20㎡付近にひくことができる。また1人あたり面積と評価の関係では、幼稚園において1.2㎡のところ評価境界をひくことができる。3歳児では、幼稚園と保育所が分離して分布していることが特徴的である。4歳児においては遊び

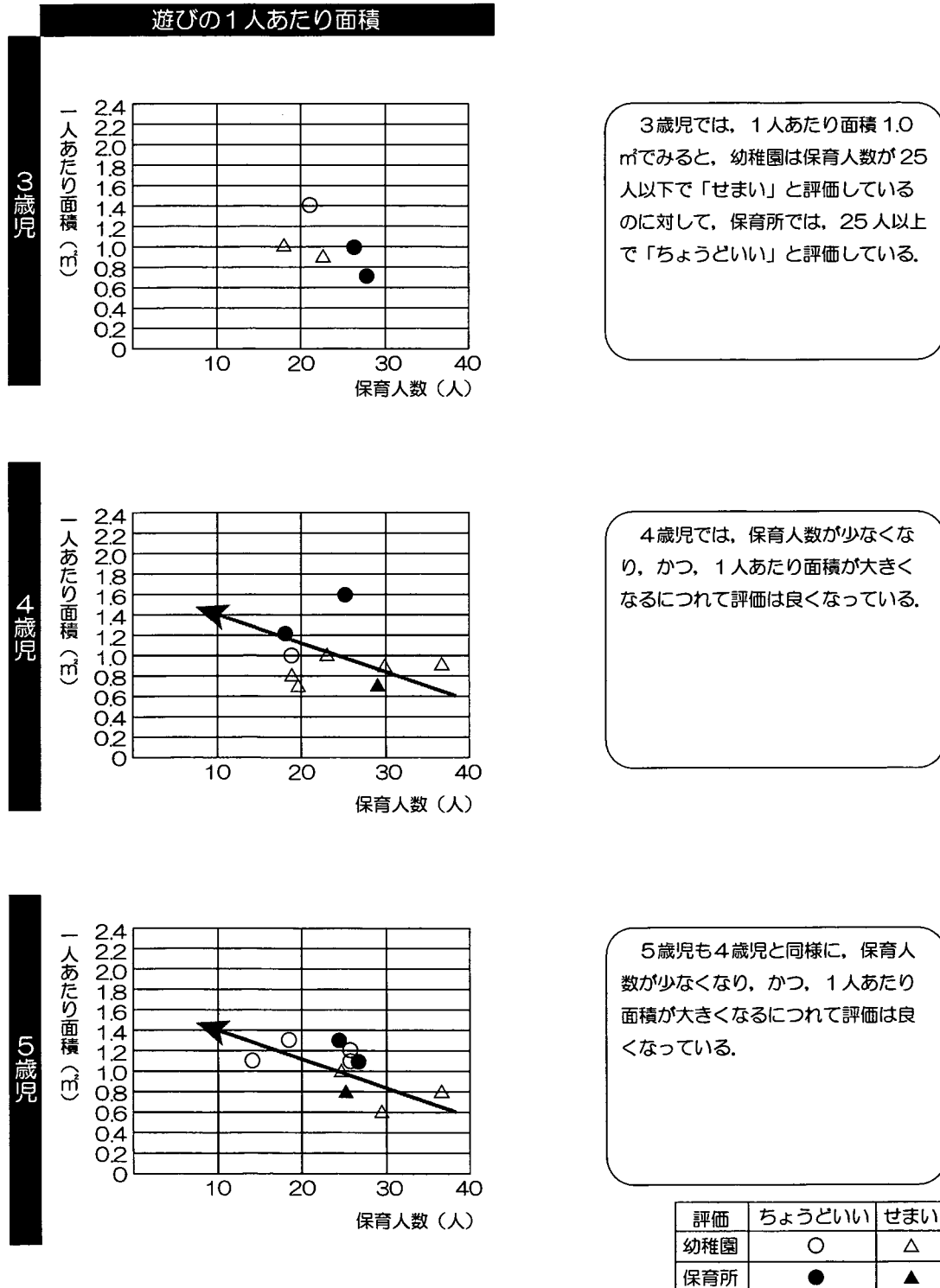


図14 遊び場面 (保育単位) の面積・1人あたり面積と評価の関係

のクラス面積と評価の間には評価境界をひくことができないが、1人あたり面積と評価の関係では1.0㎡のところ評価境界をひくことができる。また、4歳児の幼稚園の遊び場面の1人あたり面積は1.0㎡以下に分布しており、「せまい」の評価が多い。5歳児においては4歳児のときと同様に、遊びのクラス面積と評価の間には評価境界をひくことができないが、1人あたり面積と評価の関係では1.1㎡のところ評価境界をひくことができる。さらに、遊びのみ面積の時と同様に、遊び面積においても、1人あたり面積と評価において保育人数で比較した(図14)。3歳児では、幼稚園と保育園が分離して分布している。1人あたり面積1.0㎡でみると、幼稚園は保育人数が25人以下で「せまい」と評価しているのに対して、保育所では、25人以上で「ちょうどいい」と評価しているのが特徴的である。4歳児では、保育人数が少なくなり、かつ、1人あたり面積が大きくなる(図上では左上がりの直線を描く)につれて評価は良くなっている。5歳児も4歳児と同様に、保育人数が少なくなり、かつ、1人あ

たり面積が大きくなるにつれて評価は良くなっている。

C. 5 1人あたりの遊び面積と1人あたりの保育室面積の関係

1人あたりの保育室面積と広さ感評価との関係で「ちょうどいい」の評価が1人あたりの保育室面積が2.0㎡以上のときしかみられなかったという結果と遊びの1人あたり面積に評価境界があるという結果をもとに1人あたりの遊び面積と1人あたりの保育室面積の関係を図15によって表わした。

図より保育室の1人あたり面積が2.0㎡以上で評価のよくない保育室は遊びの1人あたり面積が評価境界未満であることが分かる。また、遊びの1人あたり面積が評価境界以上だった事例はすべて保育室の1人あたり面積が2.0㎡以上であることが読み取れる。よって、評価が「ちょうどいい」の保育室は、保育室面積が2.0㎡以上で、遊びの1人あたり面積が評価境界以上であることが分かった。

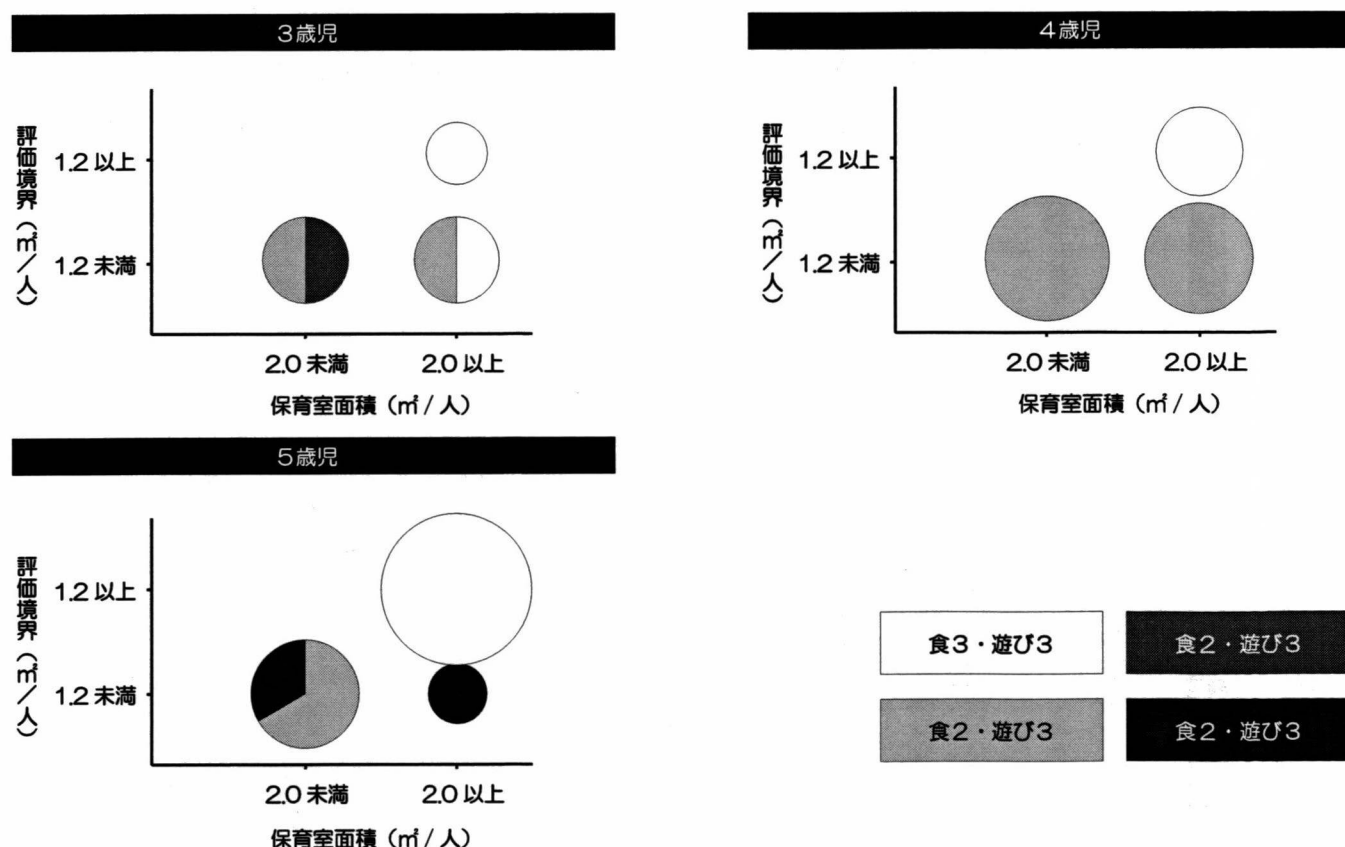


図15 1人あたりの遊び面積と1人あたりの保育室面積の関係

D. 考察

議論の前提として、保育室の面積は、狭すぎても広すぎても保育やこどもの成長発達、心理面への影響において支障を来す可能性があることを想定して「適正規模」の用語を用いる。ただし、本稿における調査対象施設では、保育室面積について「広い」「広すぎる」という評価はなく、「やや狭い」「ちょうどいい」評価に全体の評価が分布した。このため、調査結果に照らして述べると、適正な保育室面積規模のうち「下限」が示されたと解釈する。なお、保育単位については適正規模ないしその上限が示された。

D. 1 3歳児クラスにおける保育室の適正規模

3歳児クラスにおいては事例数が少ないということもあり遊びにおける評価境界を求めることが困難であった。また、3歳児の活動には午睡が含まれているが、多くの場合、午睡の面積は主に遊び面積と食事面積とに重なることが多かった。今回の調査では、面積規模への評価をそれぞれの場面について問う形式で行っており、場面の移行ないし併存の様態が、保育室の適正規模の評価に影響を与えている可能性がある。3歳児においてはさらなる事例の抽出が必要となるが、今回の調査において、少ない事例数ではあるが各活動面積の適正規模について以下のことが考察できる。

食事場面では、クラス面積で約10㎡～20㎡、1人あたり面積で約0.6㎡～0.9㎡の間に分布しており、「ちょうどいい」評価が多かった。そこで、食事時の適正規模としては、1人あたり面積で約0.6㎡～0.9㎡の間で落ち着くのではないかと考えられる。空き面積に関しては、クラス面積で10㎡、1人あたり面積で0.6㎡のところ評価境界がひけたため、これらの数値以上が適正規模となる可能性がある。また、遊びのみ面積に関しては、面積と評価からは適正規模が導き出せなかったため、1人あたり面積と保育人数でみたが、ここでも結果は得られなかった。遊び面積に関しては、クラス面積で20㎡、幼稚園における1人あたり面積では1.2㎡のところ評価境界をひけたため、幼稚園では、これらの数値以上、保育所ではクラス面積で20

㎡以上が適正規模になる可能性がある。

活動ごとの適正規模ではなく、保育室全体の1人あたりの保育室面積と評価をみたときに、保育所における評価境界は求めることができなかったが、幼稚園における1人あたり保育室面積の評価境界は、2.0㎡でひけるのではないかと考えられる。この値を超えている事例においては「ちょうどいい」の評価を得られた。

D. 2 4歳児クラスにおける保育室の適正規模

4歳児において、食事場面では、すべての施設で「ちょうどいい」の評価を得たため、クラス面積で約10㎡以上、1人あたり面積で約0.5㎡以上で適正規模となりうると考えられる。空き面積に関しては、面積と評価からは適正規模が導き出せなかった。遊びのみ面積に関しては、1人あたり面積と保育人数でみたところ、保育人数が20人以下、または、1人あたり面積が0.6㎡以上で評価境界がひけたため、これらの条件に沿うかたちで適正規模を算出できる可能性がある。つまり、適正規模には保育室面積のみならず、保育単位も影響を及ぼす。

遊び面積に関しては、クラス面積で評価境界をひくことができなかったが、1人あたり面積では1.0㎡のところ評価境界をひけたため、1人あたり面積に関しては、この数値以上が適正規模となるのではないかと考えられる。また、1人あたり面積と保育人数でみたところ、保育人数が少なくなり、1人あたりの面積が大きくなるにつれて評価がよくなるといった相関関係があることが分かった。さらに、4歳児では保育室全体の1人あたりの保育室面積が2.0㎡を超えており、評価境界を超えている事例において「ちょうどいい」の評価だった。

D. 3 5歳児クラスにおける保育室の適正規模

5歳児において、食事場面では、評価は全体として「ちょうどいい」が多かったものの、クラス面積で約10㎡～25㎡、1人あたり面積で約0.4㎡～1.0㎡の間に分布しており、評価境界をひくことができなかった。空き面積に関しては、クラス面積で15㎡、1人あたり面積では0.6㎡のところ評価境界をひけたた

め、これらの数値以上が適正規模となりうると考えられる。遊びのみ面積に関しては、4歳児と同様に、1人あたり面積と保育人数でみたところ、「ちょうどいい」の評価が多く、評価境界をひくことは難しいが、1人あたりの面積でみたときに、0.2㎡以下の場合に3施設中すべてが「せまい」と評価しているため、この数値が適正規模を求める際の1つの条件となる可能性が指摘できる。遊び面積に関しては、クラス面積で評価境界をひくことができなかつたが、1人あたり面積では1.1㎡のところ評価境界をひけたため、1人あたり面積に関しては、この数値以上が適正規模となる可能性がある。また、1人あたり面積と保育人数でみたところ、保育人数が少なくなり、1人あたりの面積が大きくなるにつれて評価がよくなるといった4歳児と同様な相関関係があることが分かった。さらに、5歳児においても、保育室全体の1人あたりの保育室面積が2.0㎡を超えており、評価境界を超えている事例において「ちょうどいい」の評価だった。

E. 結論

本稿では、園児の活動実態からみた保育室の適正規模算定についての試論を示した。3～5歳児室での観察調査、保育者からの評価に関するヒアリング調査を行った結果、各年齢、各活動でのクラス面積・1人あたり面積での評価境界を一部で見いだすことができた。今回の調査では事例数が少ないため、保育室全体やそれぞれの場面に適した面積を明確に導き出すことはできなかつたが、保育室の適正規模の算定にあたっては、保育室全体の1人あたり面積のみならず、実際に遊びに使用される面積を十分に確保されるような誘導や設えの重要性が指摘できた。

今後は、さらに事例数も増やすと同時に、関西地区だけでなく全国の幼稚園、保育所についても比較・考察していく予定である。

G. 研究発表

1. 論文発表

本稿は、関東地域、東海地域での類似調査の結果を基に分析の拡張を行ったうえでの日本建築学会計画系

論文集への投稿を予定している。なお、同拡張研究については第一次調査を実施済みであり、データの整理・分析を行っている段階である。

2. 学会発表

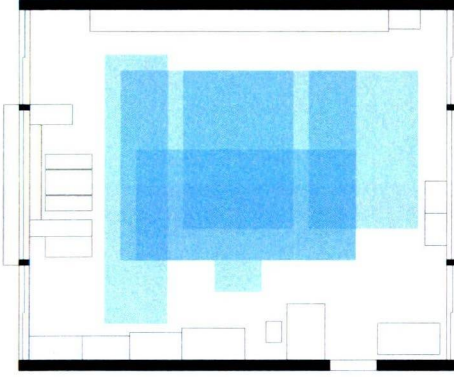
本稿は、加筆・修正のうえ、日本建築学会大会学術講演ないし人間・環境学会大会での発表を予定している。

参考文献

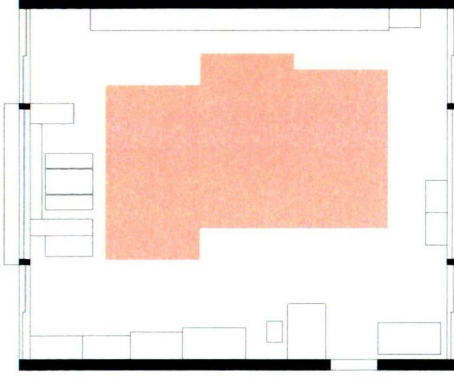
- 1) 山田恵美, 佐藤将之, 山田あすか: 自由遊びにおける園児の活動規模と遊びの種類およびコーナーの型に関する研究, 日本建築学会計画系論文集 第74巻 第637号, 掲載頁未定, 2009.03
- 2) 山田恵美, 山田あすか, 佐藤将之: 幼保一体型施設における活動の分布と規模変化に関する研究, 日本建築学会計画系論文集 第74巻 第638号, 掲載頁未定, 2009.04

施設番号1 Hy 5歳児, 53㎡, 18人 調査時間 9:00～14:00

遊びの場面

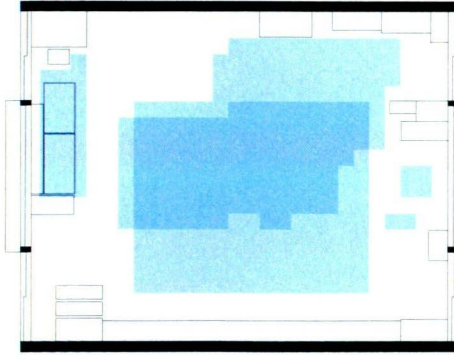


食事の場面

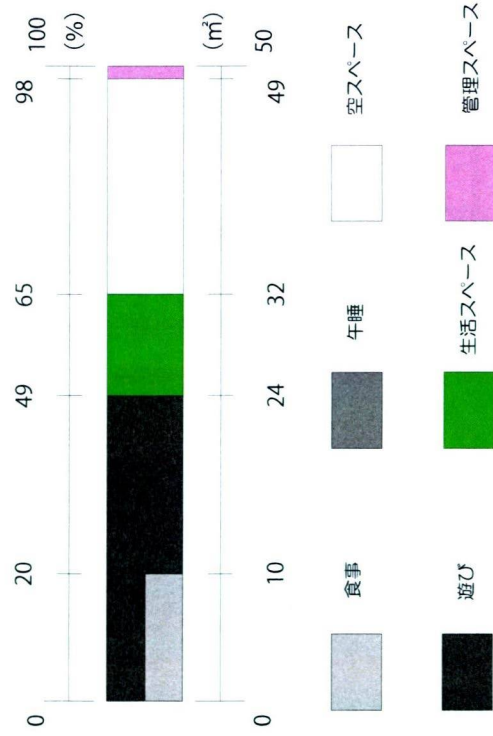
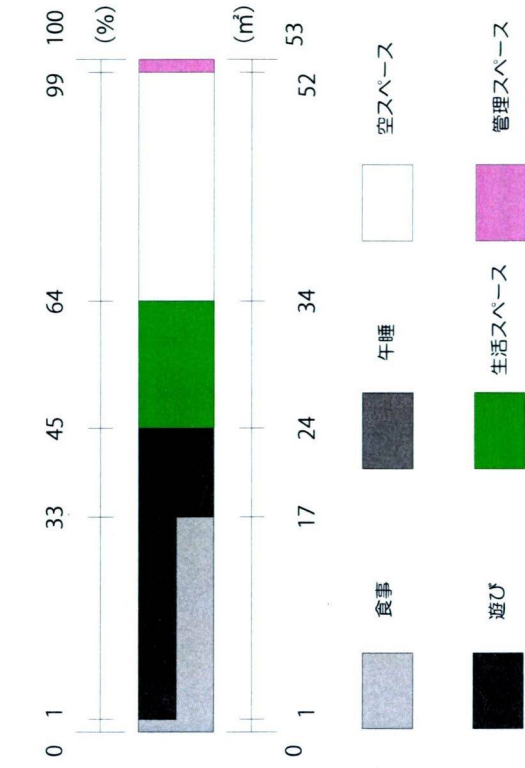
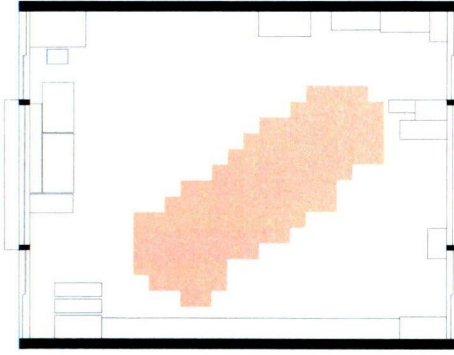


施設番号1 Hy 4歳児, 50㎡, 23人 調査時間 9:00～14:00

遊びの場面

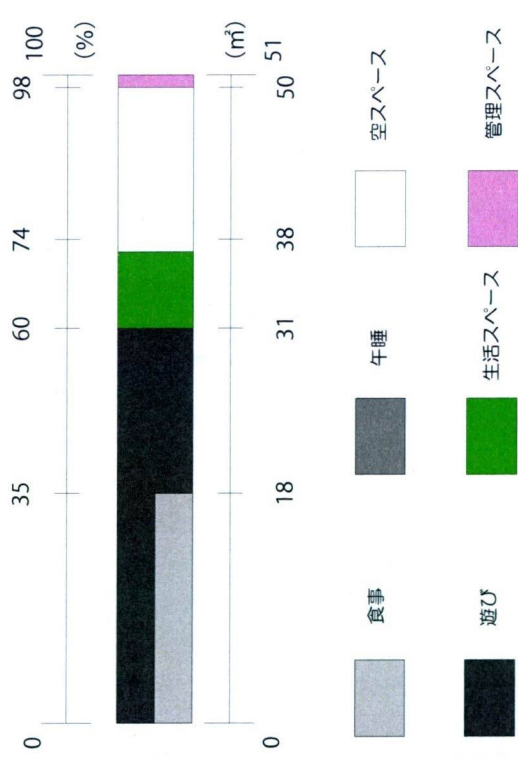
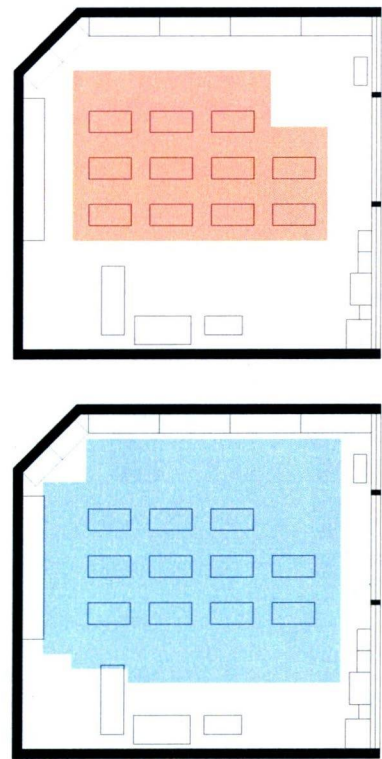


食事の場面



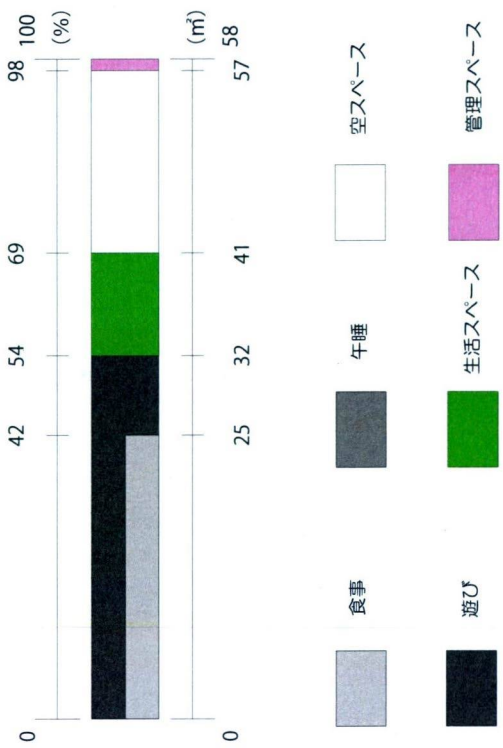
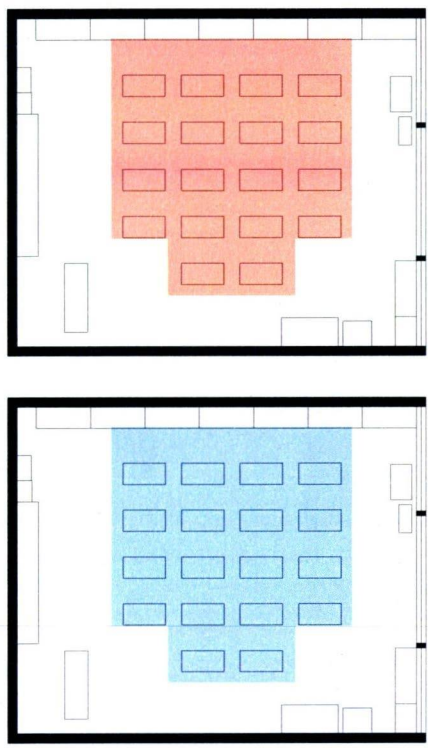
施設番号2 Py 3歳児, 51㎡, 22人 調査時間 9:00～14:00

遊びの場面 食事の場面



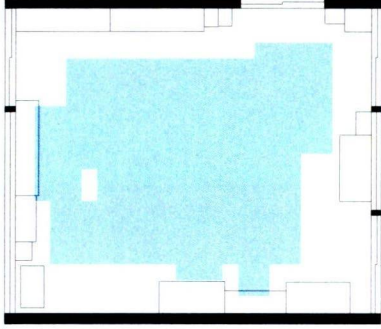
施設番号2 Py 4歳児, 58㎡, 36人 調査時間 9:00～14:00

遊びの場面 食事の場面

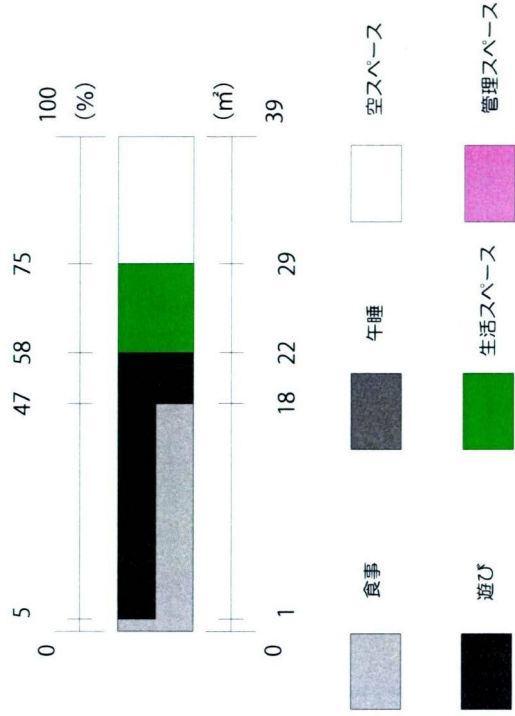
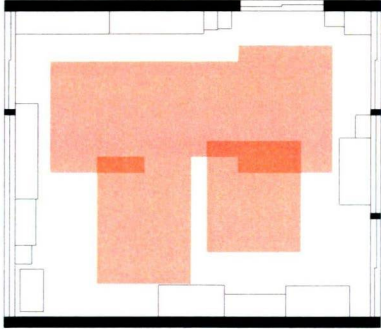


施設番号 3 Ey 3歳児, 39㎡, 23人 調査時間 9:00 ~ 14:00

遊びの場面

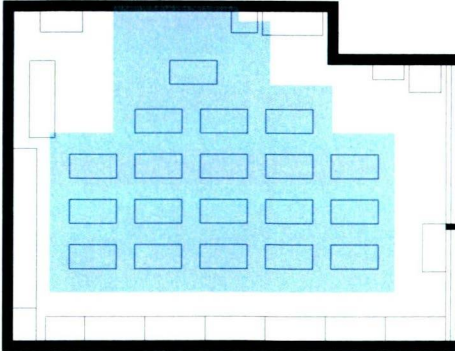


食事の場面

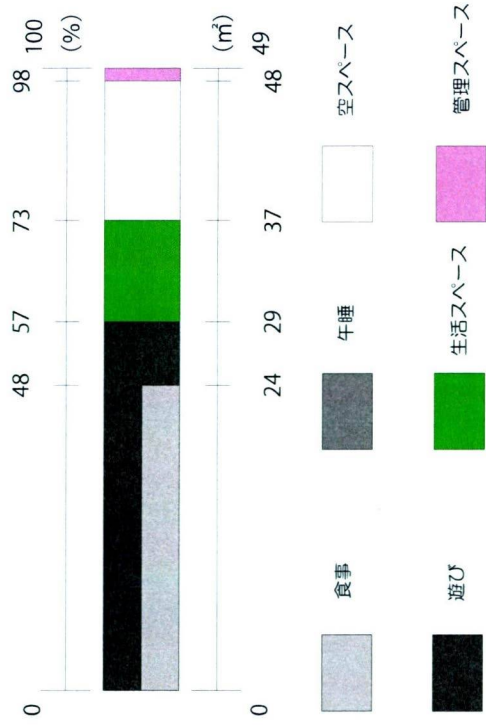
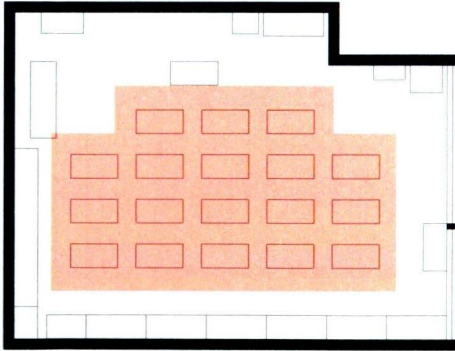


施設番号 2 Py 5歳児, 49㎡, 36人 調査時間 9:00 ~ 14:00

遊びの場面

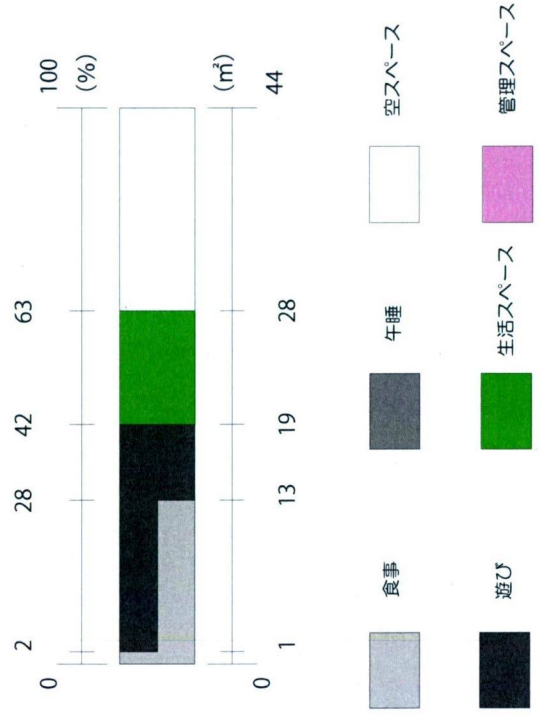
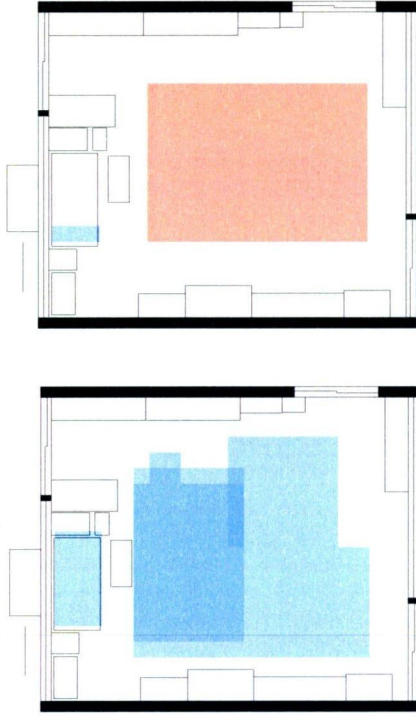


食事の場面



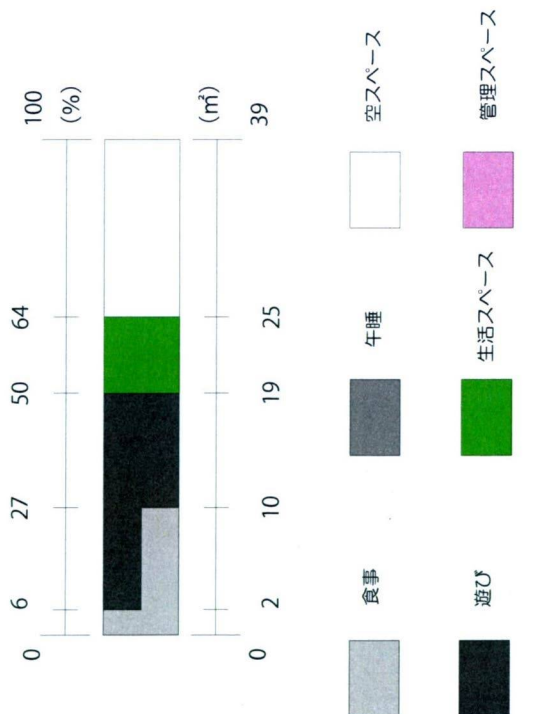
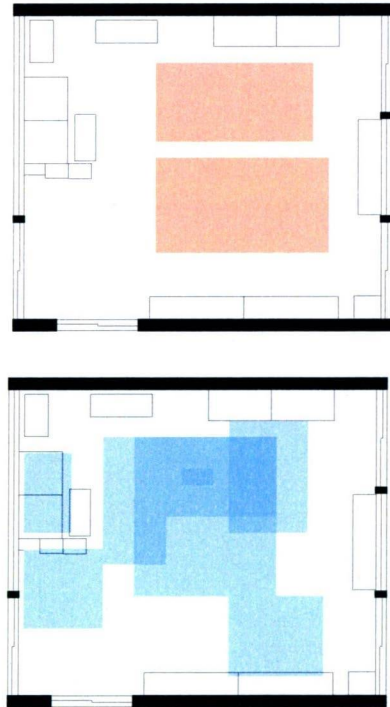
施設番号3 Ey 5歳児, 44㎡, 29人 調査時間 9:00 ~ 14:00

遊びの場面 食事の場面



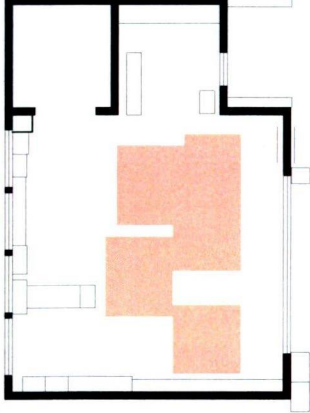
施設番号3 Ey 4歳児, 39㎡, 20人 調査時間 9:00 ~ 14:00

遊びの場面 食事の場面

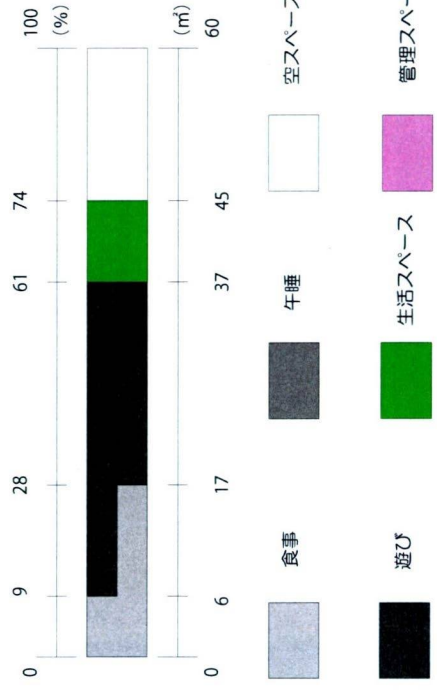
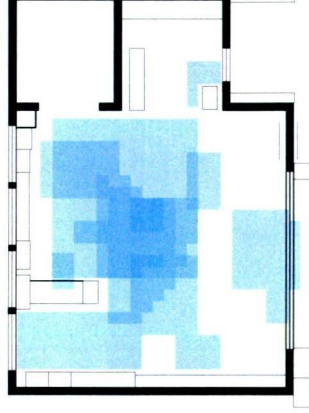


施設番号 4 Sy 5 歳児, 60 m², 26 人 調査時間 9:00 ~ 14:00

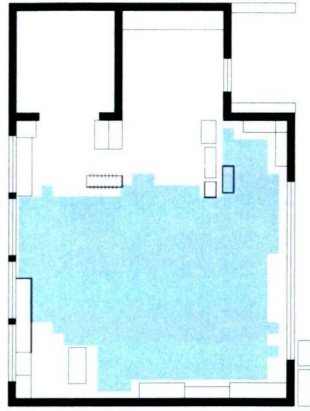
遊びの場面



食事の場面

施設番号 4 Sy 4 歳児, 60 m², 31 人 調査時間 9:00 ~ 14:00

遊びの場面



食事の場面

